砂の女

安部公房

砂の女

安部公房

砂の女

●著者　安部公房　●発行者　佐藤亮一
●印刷所　株式会社光邦　●製本　神田
加藤製本　●発行所　株式会社 新 潮 社
〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
電話　業務部(03)266-5111　編集部(03)266-5411
昭和37年6月4日発行昭和55年5月25日46刷
定価1400円

© Kôbô Abe Printed in Japan 1962
乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

砂の女

――罰がなければ、逃げるたのしみもない――

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

1

八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。捜索願も、新聞広告も、すべて無駄におわった。

むろん、人間の失踪は、それほど珍らしいことではない。統計のうえでも、年間数百件からの失踪届が出されているという。しかも、発見される率は、意外にすくないのだ。殺人や事故であれば、はっきりとした証拠が残ってくれるし、誘拐のような場合でも、関係者には、一応その動機が明示されるものである。しかし、そのどちらにも属さないとなると、失踪は、ひどく手掛りのつかみにくいものになってしまうのだ。仮に、それを純粋な逃亡と呼ぶとすれば、多くの失踪が、どうやらその純粋な逃亡のケースに該当しているらしいのである。

彼の場合も、手掛りのなさという点では、例外でなかった。行先の見当だけは、一応ついてい

たものの、その方面からそれらしい変死体が発見されたという報告はまるでなかったし、仕事の性質上、誘拐されるような秘密にタッチしていたとは、ちょっと考えられない。また日頃、逃亡をほのめかす言動など、すこしもなかったと言う。

当然のことだが、はじめは誰もが、いずれ秘密の男女関係だろうくらいに想像していた。しかし、男の妻から、彼の旅行の目的が昆虫採集だったと聞かされて、係官も、勤め先の同僚たちも、いささかはぐらかされたような気持がしたものだ。たしかに、殺虫瓶も、捕虫網も、恋の逃避行の隠れ蓑としては少々とぼけすぎている。それに、絵具箱のような木箱と、水筒を、十文字にかけた、一見登山家風の男がS駅で下車したことを記憶していた駅員の証言によって、彼に同行者がなく、まったく一人だったことが確かめられ、その臆測も、根拠薄弱ということになってしまったのである。

厭世自殺説もあらわれた。それを言い出したのは、精神分析にこっていた彼の同僚である。一人前の大人になって、いまさら昆虫採集などという役にも立たないことに熱中できるのは、それ自体がすでに精神の欠陥を示す証拠だというわけだ。子供の場合でも、昆虫採集に異常な嗜好をみせるのは、多くエディプス・コンプレックスにとりつかれた子供の場合であり、満たされない欲求の代償として、決して逃げだす気づかいのない虫の死骸に、しきりとピンをつきさしたがったりするのだという。まして、それが大人になってもやまないというのは、よくよく病状がこうじたしるしに相違ない。昆虫採集家が、しばしば旺盛な所有欲の持主であったり、極端に排他的であったり、盗癖の所有者であったり、男色家であったりするのも、決して偶然ではないのであ

る。そして、そこから厭世自殺までは、あとほんの一歩にすぎまい。現に、採集マニアのなかには、採集自体よりも、殺虫瓶のなかの青酸カリに魅せられて、どうしても足を洗うことが出来なくなった者さえいるそうだ。……そう言えば、あの男がわれわれに、その趣味を一度も打ち明けようとしなかったこと自体、彼が自分の趣味を、後ろ暗いものとして自覚していた証拠なのではあるまいか？

だが、そのせっかくのうがった推理も、事実として、死体が発見されなかったのだから、問題にはならなかった。

こうして、誰にも本当の理由がわからないまま、七年たち、民法第三十条によって、けっきょく死亡の認定をうけることになったのである。

2

ある八月の午後、大きな木箱と水筒を、肩から十文字にかけ、まるでこれから山登りでもするように、ズボンの裾を靴下のなかにたくしこんだ、ネズミ色のピケ帽の男が一人、S駅のプラットホームに降り立った。

だが、このあたりには、わざわざ登るほどの山はない。改札口で切符を受取った駅員も、つい不審の表情で見送った。男はためらいも見せず、駅前のバスの、一番奥の座席に乗り込んだ。そ

れは山とは逆方向に向うバスだった。
男は終点まで乗りつづけた。バスを降りると、ひどく起伏の多い地形だった。低地がせまく仕切られた水田になり、そのあいだに小高い柿畠が島のように点在していた。男はそのまま村を通りぬけ、次第に白っぽく枯れていく海辺に向って、さらに歩きつづけた。
やがて人家がつきると、まばらな松林になった。いつか地面は、きめの細かい、足の裏に吸いつくような砂地に変っている。ところどころ、乾いた草むらが砂のくぼみに影をつくり、また間違えたように畳一枚ほどの貧弱なナス畠があったりしたが、人影らしいものは、まるでなかった。いよいよこの先が目指す海にちがいない。
はじめて男は、足をとめた。あたりを見まわしながら、上衣の袖で汗をぬぐった。おもむろに、木箱を開けて、上蓋から、たばねた幾本かの棒きれをとりだした。組立てると、捕虫網になった。柄の先で、草むらを叩いたりしながら、また歩きだした。砂の上には、潮のかおりがたちこめていた。
いつまでたっても海は見えなかった。地面のうねりで、見とおしがわるいせいか、同じような風景が、際限もなくつづくのだ。それから、とつぜん視界がひらけて、小さな部落があらわれた。高い火の見櫓を中心に、小石でおさえた板ぶきの屋根がむらがった、貧しいありふれた村落である。むろん、その中の何軒かは、黒い瓦ぶきだったり、べにがら色のトタンぶきだったりした。トタンぶきの建物は、部落の中の唯一の四つ辻の角にあって、どうやら漁業組合の集合所らしかった。

この向うに、目的の海も、砂丘もあるのだろう。だがその部落は意外に広かった。わずかに土が露出しているところもあったが、大半は白く乾いた砂地だった。それでも、落花生や芋の畠がつくられていたし、潮のにおいにまじって、家畜のにおいもした。砂と粘土で、しっくいのように固められた道端には、くだかれた貝殻が、白い山をつくっていたりした。

男がその道を通っていくと、漁業組合の前の空地で遊んでいた子供たちも、傾いた縁側に腰をおろして網をつくろっていた老人も、一軒だけの雑貨屋の店先にたむろしていた髪の薄くなった女たちも、一瞬その手や口を休め、いぶかるような視線をなげかけてきた。しかし男は、一向に気にしない。彼に関心があるのは、もっぱら砂と虫だけだったのである。

意外なのは、ただ部落の広さだけではなかった。道が次第に上り坂になっていく。これはまったく予期に反したことだった。海にむかっている以上は、当然下り坂でしかるべきではあるまいか。地図の読みちがえだったのだろうか？　ちょうど通りかかった若い娘に、声をかけてみる。娘は、あわてて目をそらせ、まるで聞えなかったような素振りで、行きすぎてしまうのだ。やむをえない。かまわず先に進んでみることにしよう。とにかく、砂の色や、魚の網や、貝殻の山などで、海が近いことだけは確かなのだから。事実、危険を予知させるものなど、まだ何もなかった。

道はますます急な上り坂になり、ますます砂らしい砂になった。

ただ、奇妙なことに、家の建っている部分は、すこしも高くならないのだ。道だけが高くなって、部落自身は、いつまでも平坦なのだ。いや、道だけでなく、建物と建物のあいだの境の部

分も、道とおなじように高くなっていた。だから、見方によっては、部落全体が上り坂になっているのに、建物の部分だけが、そのままもとの平面にとり残されているようでもある。この印象は、先に進むにつれてひどくなり、やがて、すべての家が、砂の斜面を掘り下げ、そのくぼみの中に建てたように見えてきた。さらに、砂の斜面のほうが、屋根の高さよりも高くなった。家並は、砂のくぼみの中に、しだいに深く沈んでいった。

傾斜が急にけわしくなった。このあたりでは、屋根のてっぺんまで、すくなく見つもっても、二十メートルはあるだろう。一体どんな暮しをしているのか、奇怪な思いで深い穴の底の一つをのぞきこもうと、縁にそってまわりこむと、とつぜん激しい風に、息をつまらせた。いきなり視界がひらけ、にごった海が泡立ちながら、眼下の波打ちぎわを舐めていた。目指す砂丘の頂上に立っているのだった。

季節風が吹きつける、海に面した部分は、砂丘の定石どおり、盛上ったような急傾斜で、葉の薄い禾本科の植物が、すこしでもなだらかな部分をえらんで、細々と群がっている。だが、部落の側を振返ると、砂丘の頂上に近いほど深く掘られた、大きな穴が、部落の中心にむかって幾層にも並び、まるで壊れかかった蜂の巣である。砂丘に村が、重なりあってしまったのだ。あるいは、村に砂丘が、重なりあってしまったのだ。いずれにしても、苛立たしい、人を落着かせない風景だった。

しかし、目指す砂丘にたどりつけたのだから、これでいい。男は水筒の水をふくみ、それから口いっぱいに風をふくむと、透明にみえたその風が、口のなかでざらついた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

……砂地にすむ昆虫の採集が、男の目的だったのである。

むろん、砂地の虫は、形も小さく、地味である。だが、一人前の採集マニアともなれば、蝶やトンボなどに、目をくれたりするものでない。彼等マニア連中がねらっているのは、自分の標本箱を派手にかざることでもなければ、分類学的関心でもなく、またむろん漢方薬の原料さがしでもない。昆虫採集には、もっと素朴で、直接的なよろこびがあるのだ。新種の発見というやつである。それにありつけさえすれば、長いラテン語の学名といっしょに、自分の名前もイタリック活字で、昆虫大図鑑に書きとめられ、そしておそらく、半永久的に保存されることだろう。たとえ、虫のかたちをかりてでも、ながく人々の記憶の中にとどまれるとすれば、努力のかいもあるというものだ。

そういうチャンスは、やはりどうしても、変種が多くて目立たない、小昆虫の仲間に多かった。それで彼も、ながいあいだ、人のいやがる双翅目の、それも蠅の仲間に目をつけて来たものだ。たしかに、蠅の種属は、おどろくほど豊富である。とは言え、人間の考えることは大体同じようなものらしく、日本で八匹目というような珍種まで、ほとんどあさりつくされてしまっていた。どうやら、蠅の生活環境が、人間の環境にあまり近すぎたためらしい。

むしろ最初から、その環境のほうに着目してかかればよかったのだ。変種が多いということは、とりもなおさず、それだけ適応性が強いということではあるまいか。この発見に彼は小踊りした。おれの思いつきも、まんざらじゃない。適応性が強いということは、他の昆虫には住めないような

悪い環境でも、平気だということだろう。たとえば、すべての生物が死に絶えた、沙漠のような……

以来、彼は、砂地に関心を示しはじめた。そして間もなく、その効果があらわれた。ある日、家の近くの河原で、鞘翅目ハンミョウ属の、ニワハンミョウ（Cicindela Japana, Motschulsky.）に似た、小っぽけな薄桃色の虫を見つけたのだ。むろん、ニワハンミョウに、色や模様の変りものが多いことは、周知の事実である。しかし、前足の形ということになれば、話はまた別だ。鞘翅目の前足は、類別のための大切な規準であり、前足の形がちがえば、それはもう種のちがいを意味している。その、彼の目にとまった虫の、前足の第二節目は、じつにきわだった特徴をもっていたのである。

ふつう、ハンミョウ属の前足は、いかにも敏捷そうに、黒くほっそりしているものだ。ところが、そいつの前足ときたら、まるで部厚い鞘をかぶせたように、もっこりとしていて、黄味がかっていた。むろん、花粉がまぶされていたのかもしれない。だとしても、花粉を附着させておくための、なんらかの装置――たとえば、毛のようなもの――が、あったかもしれないということは、じゅうぶんに考えられることだ。もし、彼の見間違いでなければ、これは大変な発見になるはずのものだった。

ただし、残念なことに、とり逃してしまったのである。少々興奮しすぎていたせいもあり、それにハンミョウというやつは、ひどくまぎらわしい飛び方をする。飛んで逃げては、まるでつかまえてくれと言わんばかりに、くるりと振り向いて待ちうける。信用して近づくと、また飛んで逃げては、振り向いて待つ。さんざん、じらしておいて、最後に草むらの中に消えてしまうとい

う寸法だ。

こうして彼は、その黄色い前足をもったニワハンミョウに、すっかりとりこにされてしまったのである。

砂地に注目した彼の見当はどうやら間違っていなかったらしい。事実、ハンミョウ属は、代表的な沙漠の昆虫でもあった。一説によると、その奇妙な飛び方は、ねらった小動物を巣からさそい出すための罠なのだともいう。たとえば、ネズミやトカゲなどが、ついさそわれて沙漠の奥に迷いこみ、飢えと疲労でたおれるのを待って、その死体を餌食にするというのである。フミツカイなどと、いかにも優雅な和名をもち、一見優男風の姿をしていながら、実は鋭い顎をもち、共食いさえ辞さないほどの獰猛な性質なのだ。その説の真偽はさておくとしても、すくなくも彼が、ニワハンミョウの妖しい足どりに、すっかり魅せられてしまったことだけは、もはや疑えないことだった。

そうなると、そのニワハンミョウを存在させる条件である、砂に対する関心も、いやがうえにも高まらざるを得ない。彼はいろいろと、砂に関する文献に目をとおしたりしはじめた。しらべてみると、砂というやつも、なかなか面白いものだ。たとえば、百科辞典で砂の項目をひいてみると、次のように書いてある。

《砂——岩石の砕片の集合体。時として磁鉄鉱、錫石、まれに砂金等をふくむ。直径 2～1/16m.m.》

いかにも明瞭な定義である。砂とは要するに、砕けた岩石のなかの、石ころと粘土の中間だということだ。しかし、単に中間物というだけでは、まだ完全な説明とは言いがたい。石と、砂と、粘土の三つが、複雑にまじり合っている土の中から、なぜとくに砂だけがふるい分けられ、独立の沙漠や砂地などになりえたのか？　もし単なる中間物なら、風化や水の侵蝕は、岩肌と粘土地帯とのあいだに、互いに移行する無数の中間形態をつくりえたはずである。ところが現実に存在するのは、石と、砂と、粘土、はっきり区別することができる三つの相だけなのだ。さらに奇妙なことには、それが砂であるかぎり、江之島海岸の砂であろうと、ゴビ沙漠の砂であろうと、その粒の大きさにはほとんど変化がなく、1/8m.m. を中心に、ほぼガウスの誤差曲線にちかいカーブをえがいて分布していると言うことである。

ある解説書は、風化や水の侵蝕による土の分解を、ごく単純に、軽いものから順に遠くに飛ばされる結果だと説明していた。しかしそれでは、直径 1/8m.m. のもつ特別な意味は、解き明かせない。それに対して、べつの地質学書は、次のような説明をくわえていた。

水にしても、空気にしても、すべて流れは乱流をひきおこす。その乱流の最小波長が、沙漠の砂の直径に、ほぼ等しいというのである。この特性によって、砂だけが、とくに土のなかから選ばれて、流れと直角の方向に吸い出される。土の結合力が弱ければ、石はもちろん、粘土でさえ飛ばないような微風によっても、砂はいったん空中に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられるというわけだ。どうやら、砂の特性は、もっぱら流体力学に属する問題らしかった。

そこで、さきの定義につけ加えれば——

《……なお、岩石の破砕物中、流体によってもっとも移動させられやすい大きさの粒子。》

地上に、風や流れがある以上、砂地の形成は、避けがたいものかもしれない。風が吹き、川が流れ、海が波うっているかぎり、砂はつぎつぎと土壌の中からうみだされ、まるで生き物のように、ところきらわず這ってまわるのだ。砂は決して休まない。静かに、しかし確実に、地表を犯し、亡ぼしていく……

その、流動する砂のイメージは、彼に言いようのない衝撃と、興奮をあたえた。砂の不毛は、ふつう考えられているように、単なる乾燥のせいなどではなく、その絶えざる流動によって、いかなる生物をも、一切うけつけようとしない点にあるらしいのだ。年中しがみついていることばかりを強要しつづける、この現実のうっとうしさとくらべて、なんという違いだろう。

たしかに、砂は、生存には適していない。しかし、定着が、生存にとって、絶対不可欠なものかどうか。定着に固執しようとするからこそ、あのいとわしい競争もはじまるのではなかろうか？もし、定着をやめて、砂の流動に身をまかせてしまえば、もはや競争もありえないはずである。現に、沙漠にも花が咲き、虫やけものが住んでいる。強い適応能力を利用して、競争圏外にのがれた生き物たちだ。たとえば、彼のハンミョウ属のように……

流動する砂の姿を心に描きながら、彼はときおり、自分自身が流動しはじめているような錯覚

にとらわれさえするのだった。

3

半月形にそそり立ち、城壁のように部落をとりまいている砂丘の稜線にそって、男はうつむきかげんに歩きだした。遠景にはほとんど気をとめなかった。昆虫採集家にとって必要なのは、足もとから半径三メートルばかりのあいだに、全注意力を集中しきることだった。なるべく太陽を背にしないことも、必要な心得の一つだろう。太陽を背にしては、自分の影で、昆虫どもを驚かせてしまうことになる。だから、採集マニアの額と鼻の頭は、いつもまっ黒にやけている。

男は、同じ歩調で、ゆっくりと進んで行った。一歩踏みだすごとに、砂がめくれ上って、靴の上を流れた。適当な湿気さえあれば、一日で芽をふきそうな雑草が、ところどころに浅い根をひろげている以外、生物らしいものの影一つない。ときたま、飛んで来るものがあれば、人間の汗の臭いをかぎつけてきた、ベッコウバエくらいのものである。しかし、こういう所だからこそ、期待も出来るというものだ。とくにハンミョウ属は、群居をきらい、極端な場合には一キロ四方を、たった一匹で縄張りにしていることさえあるという。根気よく、歩きまわるしかなかった。

ふと立ちどまった。草の根元で、何かが動いた。クモだった。クモには用はない。一服するつもりで、腰をおろした。絶えまなく、海から風が吹きつづけ、はるか眼の下の砂丘のふもとを、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com